令和5年度　高齢期の生活状況調査

再追跡調査

（平成29年度初回調査、令和2年度追跡調査）

報告書

亀岡市

高齢福祉課　地域包括ケア推進係

内容

1. 本調査の目的 2
2. 調査の方法 2
2－1. 調査項目と手続き 2
2－2. 調査対象者および参加者 3
2－3. 倫理的配慮 3
3. 再追跡調査の参加状況 3
4. 再追跡調査における各変数の分布と6年後の変化 3
4－1. 家族構成 4
4－2. 主観的健康感 4
4－3. WHO5－J 5
4－4. 現在どの程度幸せか 9
4－5. 基本チェックリスト 11
4－6. 老年的超越 20
4－7. 日中の過ごし方 25
4－8. 現在の暮らし（経済的な状況） 30
4－9. 社会的ネットワーク 30
4－10. 地域包括支援センターの周知度 33
5. 高齢期における身体的、心理的変化の関連要因についての縦断的検討 34

1. 本調査の目的

「亀岡市高齢期の生活状況調査」は平成28年度から実施しており、市内高齢者に関して、身体的、心理的、社会的側面から調査を行い、本市において、有効な地域包括ケアシステムの下、幸せで健康的な高齢期を創設する為のエビデンスデータの蓄積を行うことを大きな目的としている。

本報告は、平成29年度に実施した初回調査と令和2年度に実施した追跡調査に参加した者のうち、要介護認定受者、死亡、転出者を除外した229人を対象に再追跡調査を実施し、高齢期における6年間の生活状況等の変化とそれに関する要因を分析し、報告するものである。

2. 調査の方法

2－1. 調査項目と手続き

①家族構成：1項目

「1人暮らし」、「夫婦2人暮らし」、「息子・娘との2世帯」、「その他」の4区分から1つを選択する。

（※追跡、再追跡調査のみ）

②主観的健康感：1 項目

自分の健康状態がよいか悪いかの自己評価を「非常に健康だ」から「健康でない」までの 4 段階で評定するものである。得点が高いほど、健康感が悪いことを示している。

③精神的健康感（幸福感）WHO5-J：5 項目

本調査では、精神的健康の測定に、日本語版 WHO－5 精神健康状態表（以下、WHO5－J）を用いた。この質問票は 5 項目からなる質問票であり、各質問について 6 段階で評定を行うものである。得点の範囲は 0 点から 25 点であり、得点が高いほど精神的健康がよい。13 点未満であるとうつ病の罹患リスクが高いことが報告されている（Awata, et al, 2007）。

④現在どの程度幸せか：1項目

この質問は、令和5年度調査から新たに追加したものである。

「とても不幸」0点から「とても幸せ」10点までの10段階で評定をするものである。

⑤厚生労働省　基本チェックリスト（KCL）：20項目

ここでは基本チェックリスト 25 項目のうち、「暮らしぶり」（5 項目：手段的日常生活動作が可能であるか）、「運動器関係」（5 項目：運動器の機能について）、「栄養」（2 項目：低影響状態かどうか）、口腔機能（3 項目：口腔機能に問題がないか）、「閉じこもり」（2項目）「閉じこもり状態ではないか」、「認知機能」（3項目：認知機能に低下がないか）を用いた。得点が高いほど、要介護リスクが高いことを示している。

⑥日本版老年的超越質問紙改訂版の短縮版：12 項目

高齢者の心理発達の一種である老年的超越を測定する日本版老年的超越質問紙改訂版（増井ら 2013）を、更に簡便に実施するために 12 項目に短縮したもの。各項目は「そうでない」から「そうだ」の 4 段階で評定される。この短縮版では下位因子はなく、12 項目の合計得点が高いほど、老年的超越が高いことを示す。

⑦日中の過ごし方：日中の過ごし方では、（1）収入のある仕事、（2）ボランティア、（3）田畑の仕事、（4）家事、（5）家族の介護、（6）孫の世話、（7）運動、（8）学習・教養、（9）その他について、それぞれ実施の有無を尋ねた。また、（7）、（8）、（9）については具体的に何を行っているかを尋ねた。

⑧経済的状況：現在の経済的状況について、「大変苦しい」から「大変ゆとりがある」の5段階で評定した。

⑨社会的ネットワーク：6項目

この質問は、令和5年度調査から新たに追加したものである。

ここでは、（1）家族や親戚との関わり：3項目、（2）近くに住んでいる人を含む友人との関わり：3項目に

ついて、「いない」から「9人以上」までの6段階で尋ね、得点の範囲を0点から30点とし、(1)と(2)の6項目の合計得点で評定をした。

⑩地域包括支援センターの認知

「利用したことがある」、「名前も何をしているかも知っている」、「名前だけは知っている」、「知らなかった」の4段階で評定した。

⑪調査手続きおよび分析方法

調査は、対象者に対して再追跡調査の質問票を郵送する郵送調査を実施した。収集されたデータは、HAD※バージョン 18_001 を用いて統計的分析(記述統計値の算出、カイ2乗検定、分散分析、相関係数、重回帰分析など)を行った。

2－2. 調査対象者および参加者

令和5年度(2023年度)の対象者は、平成29年度に実施した「亀岡市　高齢期の生活状況調査」の回答者で、令和2年度実施の追跡調査に参加したに高齢者262人のうち、令和5年7月1日現在で、死亡(9人)、転出(2人)、要介護認定受者(22人※申請中を含む)を除いた229人が令和5年度再追跡調査の対象者となった。

この229人に対して質問票を郵送した。その結果、質問票の返送は171人からあった。

2－3. 倫理的配慮

亀岡市個人情報保護条例に基づいて実施された。調査票に個人情報の取り扱いについて記載し、返送をもって同意とみなした。

3. 再追跡調査の参加状況

表3－1は、再追跡調査への参加者数、参加率を性別、年代別に示したものである。

表3－1 再追跡調査の参加状況

	回答有	無回答	総計
女			
70代	67	25	92
80代	26	10	36
男			
70代	56	16	72
80代	21	7	28
90代	1		1
総計	**171**	**58**	**229**

	回答有	無回答	総計
女			
70代	72.8%	27.2%	100.0%
80代	72.2%	27.8%	100.0%
男			
70代	77.8%	22.2%	100.0%
80代	75.0%	25.0%	100.0%
90代	100.0%	0.0%	100.0%
総計	**74.7%**	**25.3%**	**100.0%**

4. 再追跡調査における各変数の分布と6年後の変化

平成29年度実施調査(初回調査)及び令和2年度実施調査(追跡調査)と令和5年度実施調査(再追跡調査)に参加した171人について、主たる指標の基本的特性について検討を行った。

なお、本調査における回答者のうち、90歳群男性1名については、80歳男性群に含めて分析を行った。

以下、平成29年度実施調査(初回調査)を H29 年度、令和2年度実施調査(追跡調査)を R2年度、令和5年度実施調査(再追跡調査)を R5年度と記述する。

4－1. 家族構成

R2 年度及び R5 年度の家族構成について、表4－1－1に示した。

実施年度と家族構成の間に関連があるかを検討するためにカイ2乗検定を行ったところ、両者の間に有意な関連が見られた($X^2(3, N=333, p=0.226)=4.349$。残査分析の結果、R5年度の1人暮らし($p=.040$)の人数が R2年度の1人暮らし($p=.040$)の人数より有意に多かった。

なお、H29 年度は、集約データがないため、今回は分析に含めなかった。

表4－1－1. 家族構成

クロス集計表

変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
家族構成	1人暮らし	24	38	62
	夫婦2人暮らし	80	69	149
	息子・娘との2世帯	35	30	65
	その他	29	28	57
	合計	168	165	333

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール V	.114	.007	.219
χ^2 =	4.349		
df =	3		
p =	.226		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		実施年度	
	出現値	R2	R5
家族構成	1人暮らし	**▼ 24**	**△ 38**
	夫婦2人暮らし	80	69
	息子・娘との2世帯	35	30
	その他	29	28

p値

変数		実施年度	
	出現値	R2	R5
家族構成	1人暮らし	.040	.040
	夫婦2人暮らし	.287	.287
	息子・娘との2世帯	.542	.542
	その他	.944	.944

クロス表(全体に対する比率%)

変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
家族構成	1人暮らし	7.21	11.41	18.62
	夫婦2人暮らし	24.02	20.72	44.74
	息子・娘との2世帯	10.51	9.01	19.52
	その他	8.71	8.41	17.12
	合計	50.45	49.55	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
家族構成	1人暮らし	38.71	61.29	100
	夫婦2人暮らし	53.69	46.31	100
	息子・娘との2世帯	53.85	46.15	100
	その他	50.88	49.12	100
	合計	50.45	49.55	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
家族構成	1人暮らし	14.29	23.03	18.62
	夫婦2人暮らし	47.62	41.82	44.74
	息子・娘との2世帯	20.83	18.18	19.52
	その他	17.26	16.97	17.12
	合計	100	100	100

4－2. 主観的健康感

H29年度と R2年度及び R5年度の主観的健康感について、表4－2－1に示した。

実施年度と主観的健康感でカイ2乗検定をした結果、両者に有意な関連が見られた($X^2(6, N=507, p<.001=32.030)$。

残査分析の結果、H29年度は、「非常に健康」($p<.001$)が有意に多く、「あまり健康でない」($p<.001$)が有意に少なかった。

一方、R2年度は、「非常に健康」($p=.004$)が有意に少なかった。R5年度は、「まあ健康」($p=.034$)が有意に少なく、「あまり健康でない」($p<.001$)が有意に多かった。

表4－2－1. 主観的健康感
クロス集計表

変数		実施年度			
	出現値	H29	R2	R5	合計
主観的健康感	非常に健康	33	10	17	60
	まあ健康	126	128	113	367
	あまり健康でない	9	23	35	67
	健康でない	2	6	5	13
	合計	170	167	170	507

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール V	.178	.092	.261
χ^2 =	32.030		
df =	6		
p =	.000		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		実施年度		
	出現値	H29	R2	R5
主観的健康感	非常に健康	△ **33**	▼ **10**	17
	まあ健康	126	128	▼ **113**
	あまり健康でない	▼ **9**	23	△ **35**
	健康でない	2	6	5

p値

変数		実施年度		
	出現値	H29	R2	R5
主観的健康感	非常に健康	.000	.004	.364
	まあ健康	.536	.133	.034
	あまり健康でない	.000	.795	.000
	健康でない	.160	.304	.703

クロス表(全体に対する比率%)

変数		実施年度			
	出現値	H29	R2	R5	合計
主観的健康感	非常に健康	6.51	1.97	3.35	11.83
	まあ健康	24.85	25.25	22.29	72.39
	あまり健康でない	1.78	4.54	6.90	13.21
	健康でない	0.39	1.18	0.99	2.56
	合計	33.53	32.94	33.53	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		実施年度			
	出現値	H29	R2	R5	合計
主観的健康感	非常に健康	55.00	16.67	28.33	100
	まあ健康	34.33	34.88	30.79	100
	あまり健康でない	13.43	34.33	52.24	100
	健康でない	15.38	46.15	38.46	100
	合計	33.53	32.94	33.53	100

クロス表(列ごとの比率%)

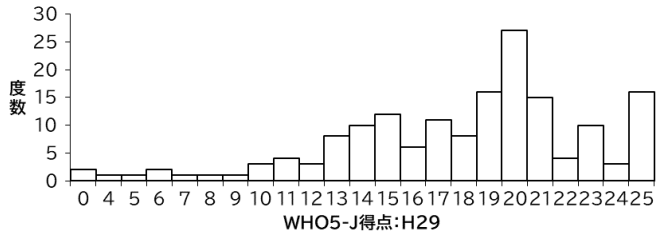
変数		実施年度			
	出現値	H29	R2	R5	合計
主観的健康感	非常に健康	19.41	5.99	10.00	11.83
	まあ健康	74.12	76.65	66.47	72.39
	あまり健康でない	5.29	13.77	20.59	13.21
	健康でない	1.18	3.59	2.94	2.56
	合計	100	100	100	100

4－3. WHO5－J

WHO5－J 得点は、得点が高い程幸福感が高いことを示す。また、13点未満であると、うつ病罹患へのリスクが有意に高いことが報告されており、13点未満かどうかがメンタルヘルスに問題がないかどうかのカットオフポイントとなっている。

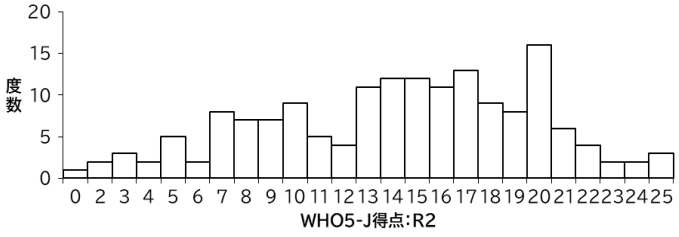
図4－3－1に得点の分布を実施年度×性別で示した。

実施年度



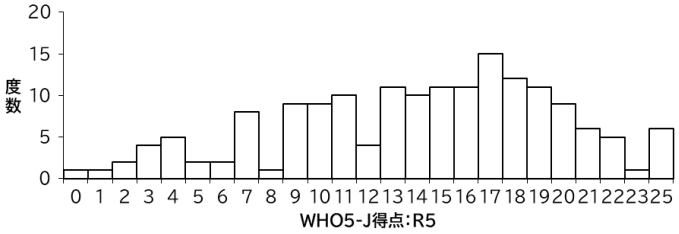
一様性の検定

χ2乗値	137.067				
自由度	22				
p値	.000				
平均値	17.909	歪度	-0.966	正規性	0.138
標準偏差	4.979	尖度	1.349	補正p値	.000



一様性の検定

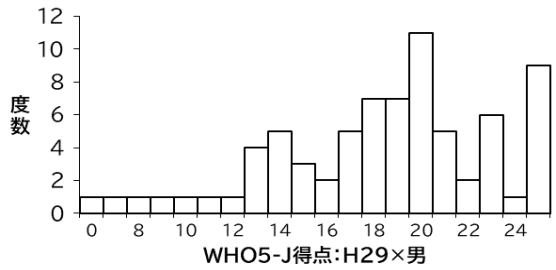
χ2乗値	64.659				
自由度	24				
p値	.000				
平均値	14.213	歪度	-0.328	正規性	0.082
標準偏差	5.525	尖度	-0.572	補正p値	.009



一様性の検定

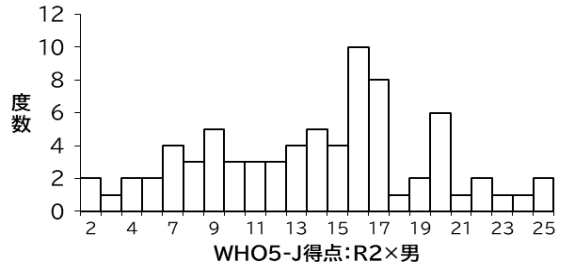
χ2乗値	64.422				
自由度	24				
p値	.000				
平均値	14.127	歪度	-0.351	正規性	0.088
標準偏差	5.636	尖度	-0.409	補正p値	.003

男性



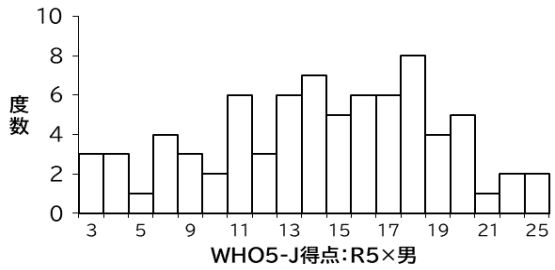
一様性の検定

χ2乗値	48.162				
自由度	19				
p値	.000				
平均値	18.297	歪度	-1.035	正規性	0.125
標準偏差	4.954	尖度	1.797	補正p値	.006



一様性の検定

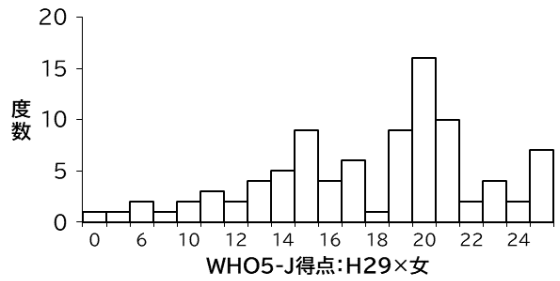
χ2乗値	44.090				
自由度	22				
p値	.003				
平均値	14.539	歪度	-0.454	正規性	0.117
標準偏差	5.506	尖度	-0.547	補正p値	.004



一様性の検定

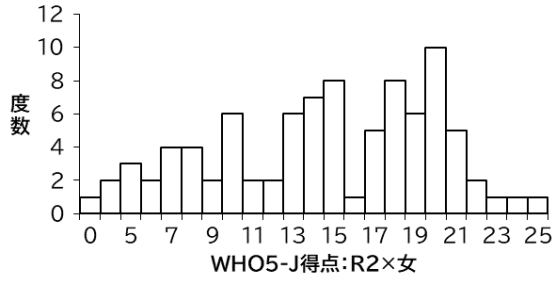
χ2乗値	35.438				
自由度	24				
p値	.062				
平均値	14.117	歪度	-0.408	正規性	0.090
標準偏差	5.166	尖度	-0.197	補正p値	.131

女性



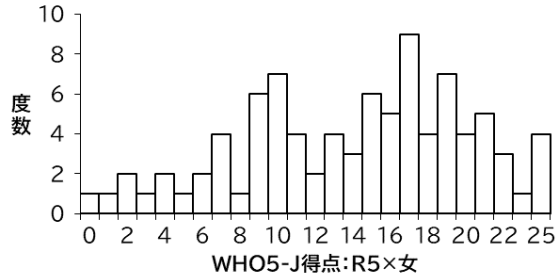
一様性の検定

χ2乗値	64.824				
自由度	19				
p値	.000				
平均値	17.593	歪度	-0.936	正規性	0.160
標準偏差	5.004	尖度	1.187	補正p値	.000



一様性の検定

χ2乗値	41.506				
自由度	22				
p値	.007				
平均値	14.528	歪度	-0.447	正規性	0.118
標準偏差	5.511	尖度	-0.558	補正p値	.004



一様性の検定

χ2乗値	33.753				
自由度	24				
p値	.089				
平均値	14.124	歪度	-0.316	正規性	0.099
標準偏差	6.045	尖度	-0.571	補正p値	.032

図4－3－1. WHO5-J得点:年度×性別

実施年度とうつ病リスクの有無について、関係があるかを検討するため、カイ2乗検定を行った結果、両者の間に有意な関連が見られた($X^2(2, N=495)=30.416, p<.001$)。

残差分析の結果、H29年度初回調査では、「リスク無」($p<.001$)が有意に高く、「リスク有」($p<.001$)が有意に少なかった。

一方、R2年度($p=.013$)及び R5年度($p=.003$)は、「リスク有」が有意に多かった。表4－3－1

表4－3－1. WHO5-Jうつ病罹患リスク
クロス集計表

変数		WHO5評価		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	146	19	165
	R2	108	56	164
	R5	107	59	166
	合計	361	134	495

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール V	.248	.163	.329
χ^2 =	30.416		
df =	2		
p =	.000		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		WHO5評価	
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有
実施年度	H29	△ **146**	▼ **19**
	R2	▼ **108**	△ **56**
	R5	▼ **107**	△ **59**

p値

変数		WHO5評価	
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有
実施年度	H29	.000	.000
	R2	.013	.013
	R5	.003	.003

クロス表(全体に対する比率%)

変数		WHO5評価		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	29.49	3.84	33.33
	R2	21.82	11.31	33.13
	R5	21.62	11.92	33.54
	合計	72.93	27.07	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		WHO5評価		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	88.48	11.52	100
	R2	65.85	34.15	100
	R5	64.46	35.54	100
	合計	72.93	27.07	100

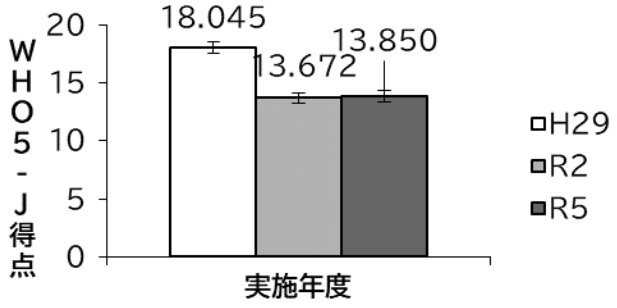
クロス表(列ごとの比率%)

変数		WHO5評価		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	40.44	14.18	33.33
	R2	29.92	41.79	33.13
	R5	29.64	44.03	33.54
	合計	100	100	100

さらに、年代、性別、実施年度の分散分析を行った結果、実施年度の主効果(F(2,483)＝27.357,p＜.001)が有意となった。

性別(F(1,483)＝0.026,p=.872)、年代(F(1,483)＝3.058,p=.081)、及び各変数の交互作用に有意な差は見られなかった。

多重比較(多重比較(Holm 法)の結果、H29年度の得点(M=18. 045,SE=0.471)が、R2年度の得点(M=13. 672,SE=0.480)と、R5年度の得点(M=13. 850,SE=0.474)より有意に高かった(R2年度:t(483)＝6. 505,p_{adj}＜.001;R5年度:t(483)＝6. 274,p_{adj}＜.001)。R2年度とR5年の得点に、有意な差は見られなかった(t(483)＝. 792,*n.s.*)。図4－3－2

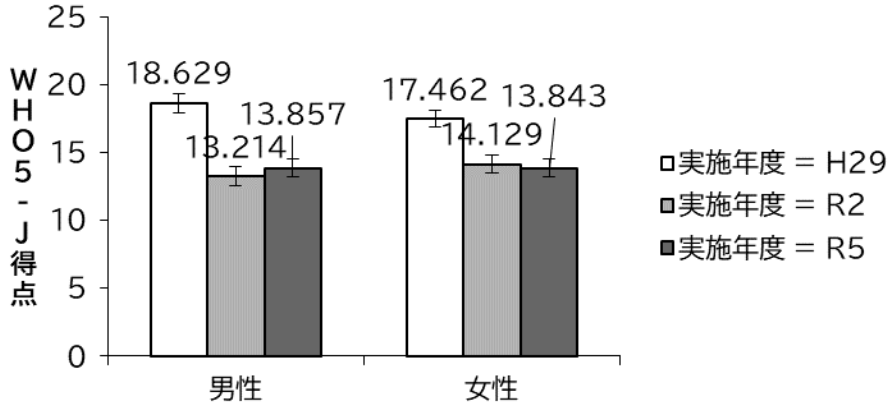


※エラーバーは標準誤差

図4－3－2. WHO5－J得点:実施年度

また、下位検定の結果、男性における実施年度の単純主効果（$F(2, 483)=17.707, p<.001$）が有意となり、多重比較（Holm法）の結果、H29年度のWHO5―Jの得点（$M=18.629, SE=0.705$）が、R2年度の得点（$M=13.214, SE=0.703$）と、R5年度の得点（$M=13.857, SE=0.689$）より有意に高かった（R2年度：$t(483)=5.437, p_{adj}<.001$；R5年度：$t(483)=4.839, p_{adj}<.001$）。R2年度の得点とR5年度の得点間には有意な差は見られなかった。（$t(483)=0.653, n.s.$）。

また、女性における実施年度の単純主効果（$F(2, 483)=10.057, p<.001$）が有意となり、多重比較（Holm 法）の結果、H29年度の得点（$M=17.462, SE=0.625$）が、R2年度の得点（$M=14.129, SE=0.652$）と、R5年度の得点（$M=13.843, SE=0.652$）より有意に高かった（R2年度：$t(483)=3.688, p_{adj}=.001$；R5年度：$t(483)=4.006, p_{adj}<.001$）。R2年度の得点と R5年度の得点間には有意な差は見られなかった。（$t(483)=0.311, n.s.$）。図4－3－3

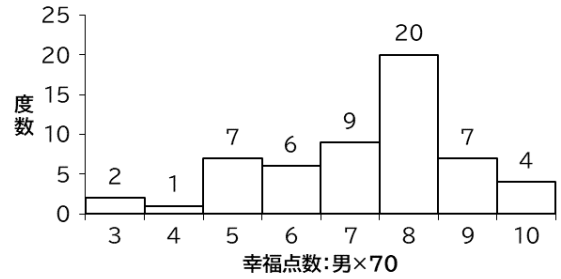


※エラーバーは標準誤差

図4－3－3. WHO5－J得点：性別×実施年度

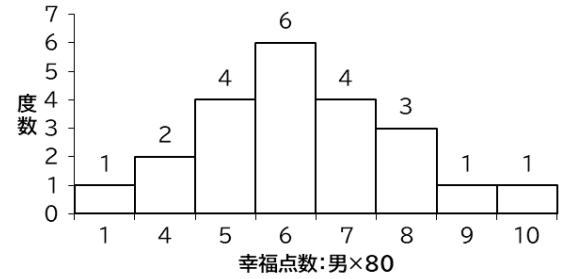
4－4. 現在どの程度幸せか

「とても不幸」から「とても幸福」までを0点から10点の10段階で評定し、点数の分布を、図4－4－1に性別、年代別に示した。



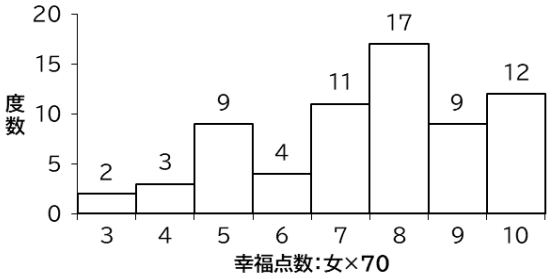
一様性の検定

χ2乗値	34.857				
自由度	7				
p値	.000				
平均値	7.268	歪度	-0.632	正規性	0.222
標準偏差	1.679	尖度	0.072	補正p値	.000



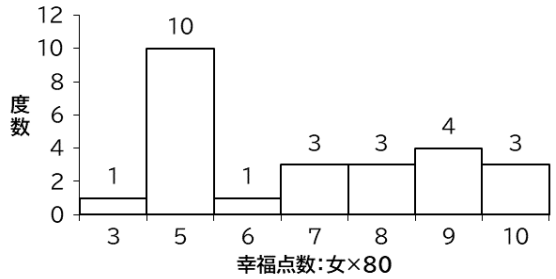
一様性の検定

χ2乗値	8.545				
自由度	7				
p値	.287				
平均値	6.182	歪度	-0.507	正規性	0.144
標準偏差	1.918	尖度	1.596	補正p値	.275



一様性の検定

χ2乗値	21.955				
自由度	7				
p値	.003				
平均値	7.478	歪度	-0.503	正規性	0.174
標準偏差	1.926	尖度	-0.562	補正p値	.000



一様性の検定

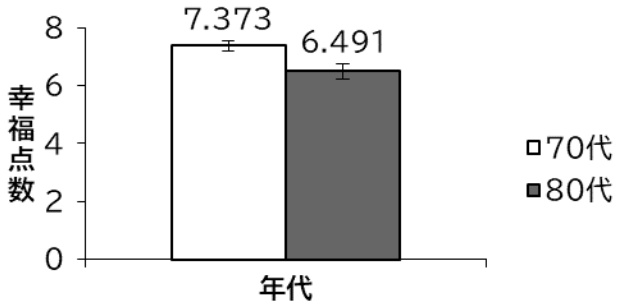
χ2乗値	15.600				
自由度	6				
p値	.016				
平均値	6.800	歪度	0.167	正規性	0.249
標準偏差	2.062	尖度	-1.257	補正p値	.000

図4－4－1.幸福度点数:性別×年代

また、性別、年代の分散分析を行った結果、年代の主効果(F(1,166)＝7.543,p=.007)が有意となった。

性別(F(1,166)＝1.662,p=.199)、性別と年代の交互作用(F(1,166)＝0.405, p=.526)は有意な差が見られなかった。

多重比較(Holm 法)の結果、70歳群の得点(M=7.373,SE=0.169)が、80歳群の得点(M=6.491,SE=0.273)より有意に高かった(t(166)＝2.746,p_{adj}=.007)。図4－4－2



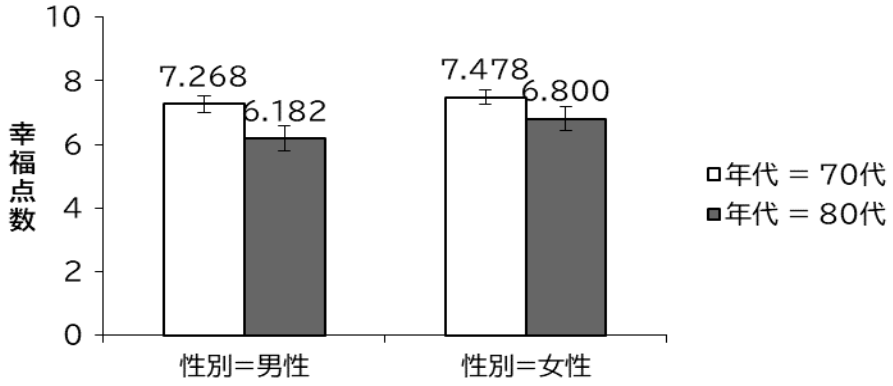
※エラーバーは標準誤差

図4－4－2. 現在どの程度幸せか（平均値）：年代

下位検定の結果、男性における年代の単純主効果（$F(1, 166)=5.341$, $p=.022$）が有意となり、70歳群の得点（$M=7.268$, $SE=0.250$）の方が、80歳群の得点（$M=6.182$, $SE=0.398$）より有意に高かった。

女性については、年代について有意な差は見られなかった（$F(1, 166)=2.397$, $p=.123$）。

図4－4－3



※エラーバーは標準誤差

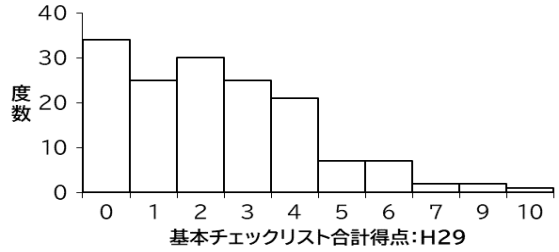
図4－4－3. 現在どの程度幸せか（平均値）：性別×年代

4－5. 基本チェックリスト

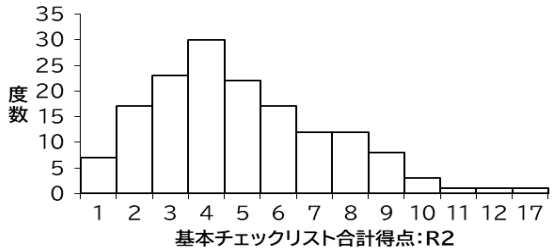
要介護リスクである基本チェックリストのうつ領域を除く20項目の合計得点の分布を図4－5－1に示した。

点数の範囲は、0点～19点で、得点が高いほど、要介護リスクが高いことを示している。

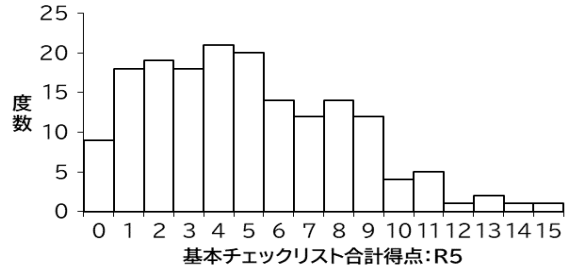
実施年度



一様性の検定
χ2乗値 96.260
自由度 9
p値 .000
平均値 2.357 歪度 1.006 正規性 0.147
標準偏差 2.041 尖度 1.289 補正p値 .000

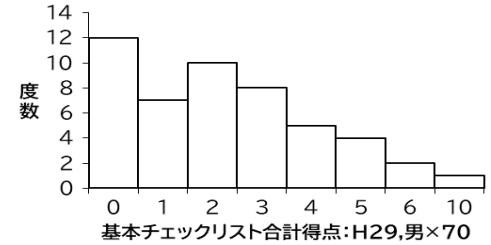


一様性の検定
χ2乗値 91.143
自由度 12
p値 .000
平均値 4.961 歪度 1.046 正規性 0.147
標準偏差 2.546 尖度 2.360 補正p値 .000

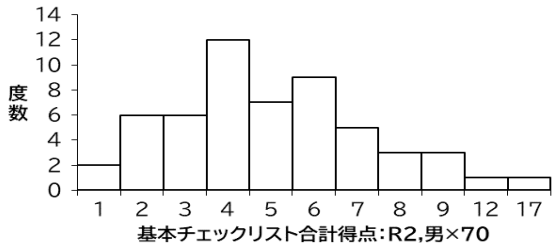


一様性の検定
χ2乗値 77.795
自由度 15
p値 .000
平均値 4.936 歪度 0.577 正規性 0.110
標準偏差 3.249 尖度 -0.131 補正p値 .000

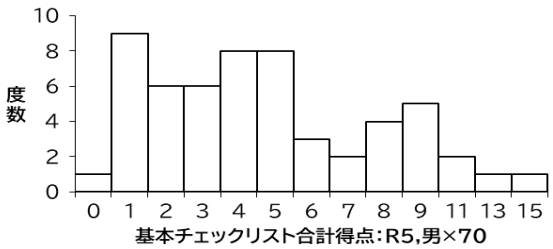
男性×70代



一様性の検定
χ2乗値 16.796
自由度 7
p値 .019
平均値 2.306 歪度 1.179 正規性 0.150
標準偏差 2.094 尖度 2.320 補正p値 .008

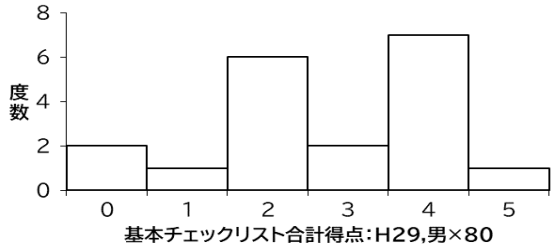


一様性の検定
χ2乗値 24.000
自由度 10
p値 .008
平均値 5.164 歪度 1.643 正規性 0.145
標準偏差 2.781 尖度 5.159 補正p値 .005

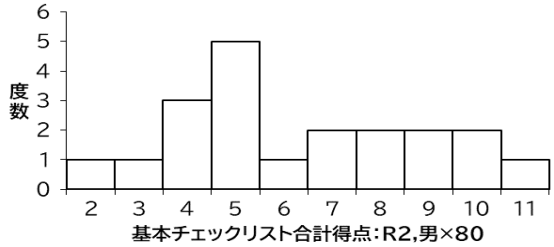


一様性の検定
χ2乗値 23.393
自由度 12
p値 .025
平均値 4.821 歪度 0.906 正規性 0.157
標準偏差 3.347 尖度 0.547 補正p値 .001

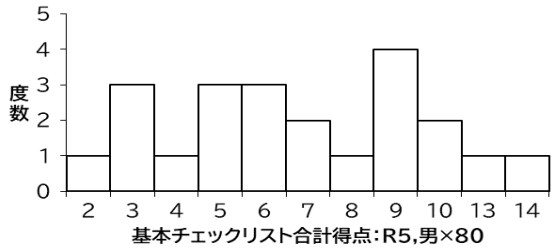
男性×80代



一様性の検定
χ2乗値 11.000
自由度 5
p値 .051
平均値 2.737 歪度 -0.469 正規性 0.230
標準偏差 1.447 尖度 -0.614 補正p値 .009

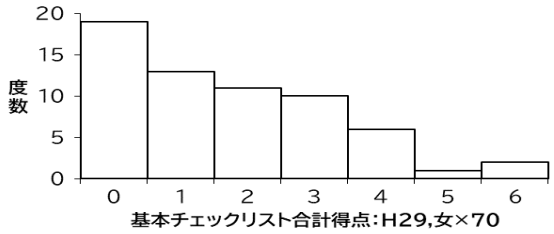


一様性の検定
χ2乗値 7.000
自由度 9
p値 .637
平均値 6.350 歪度 0.256 正規性 0.201
標準偏差 2.560 尖度 -0.970 補正p値 .033

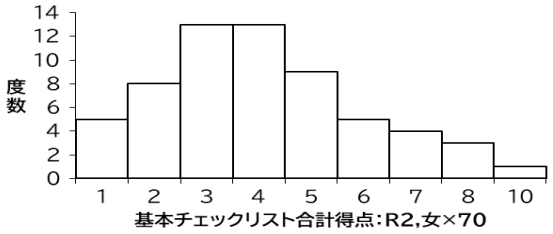


一様性の検定
χ2乗値 6.000
自由度 10
p値 .815
平均値 6.955 歪度 0.480 正規性 0.117
標準偏差 3.214 尖度 -0.213 補正p値 .607

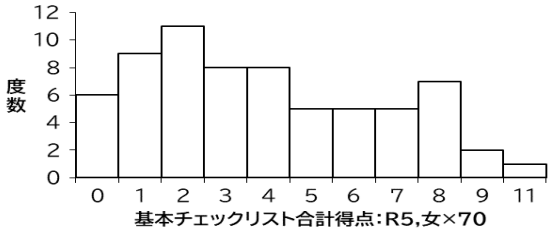
女性×70代



一様性の検定
χ2乗値 27.419
自由度 6
p値 .000
平均値 1.710 歪度 0.758 正規性 0.186
標準偏差 1.613 尖度 -0.074 補正p値 .000

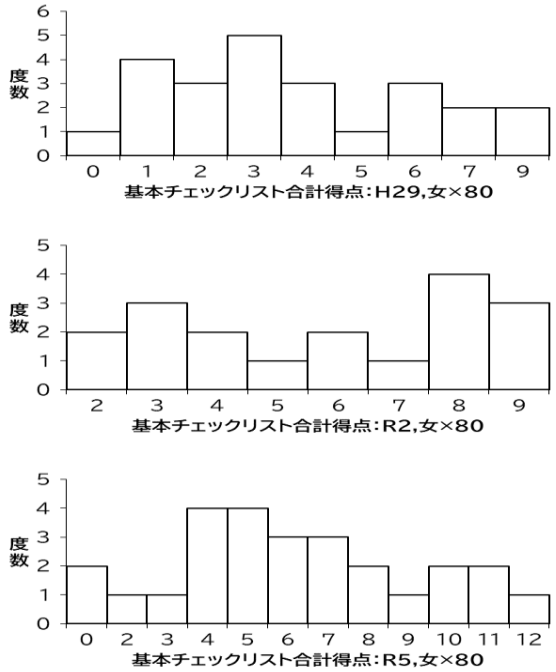


一様性の検定
χ2乗値 21.475
自由度 8
p値 .006
平均値 4.082 歪度 0.640 正規性 0.156
標準偏差 1.994 尖度 0.242 補正p値 .001



一様性の検定
χ2乗値 14.269
自由度 10
p値 .161
平均値 3.910 歪度 0.462 正規性 0.142
標準偏差 2.778 尖度 -0.751 補正p値 .002

女性×80代



一様性の検定
χ2乗値 5.250
自由度 8
p値 .731
平均値 3.833 歪度 0.581 正規性 0.170
標準偏差 2.548 尖度 -0.483 補正p値 .072

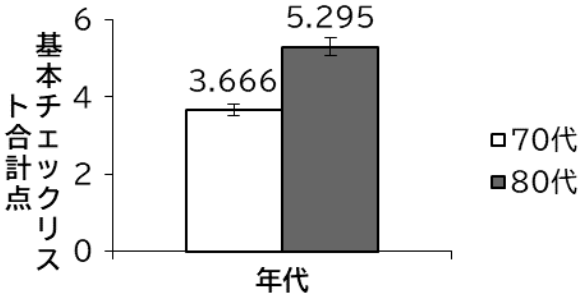
一様性の検定
χ2乗値 3.333
自由度 7
p値 .853
平均値 5.778 歪度 -0.149 正規性 0.197
標準偏差 2.557 尖度 -1.592 補正p値 .064

一様性の検定
χ2乗値 6.308
自由度 11
p値 .852
平均値 6.115 歪度 -0.010 正規性 0.100
標準偏差 3.192 尖度 -0.380 補正p値 .724

図4－5－1. 基本チェックリスト合計得点：実施年度×性別×年代

性別、年代、実施年度の分散分析を行った結果、年代の主効果（F(1,467)＝37. 795,p<.001)と、実施年度の主効果（F(2,467)＝47. 937,P<.001)が有意となった。性別の主効果は有意傾向であった（F(1,467)＝3. 336,p=.068)。各変数における交互作用は有意な差が見られなかった。

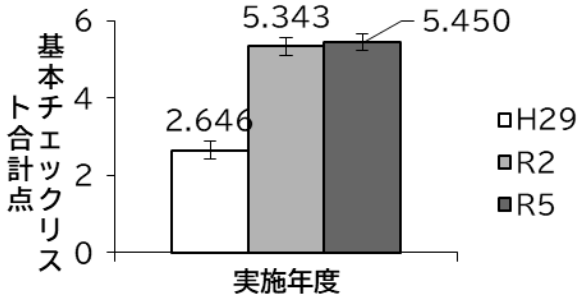
多重比較（Holm 法)の結果、70歳群の得点（M＝3. 666,SE＝0. 137)の方が、80歳群の得点（M＝5. 295,SE＝0. 227)よりも有意に低かった（t(467)＝6. 148,p_{adj}<.001)。図4－5－2



※エラーバーは標準誤差

図4－5－2. 基本チェックリスト得点（平均値）：年代

またH29年度の得点（M＝2. 646,SE＝0. 231)がR2年度の得点（M＝5. 343,SE＝0. 239)、R5年度の得点（M＝5. 450,SE＝0. 218)より有意に低かった（R2:t(467)＝8. 115,p_{adj}<.001;R5:t(467)＝8. 828,p_{adj}<.001)。R2年度とR5年度には、有意な差が見られなかった（t(467)＝0. 331,*n.s.*)。図4－5―3



※エラーバーは標準誤差

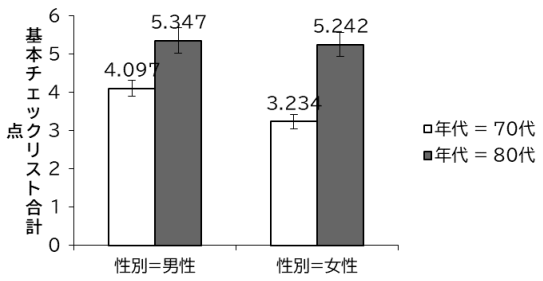
図4－5－3. 基本チェックリスト得点(平均値):実施年度

下位検定の結果、男性における年代の単純主効果($F(1, 467)=10.545, p_{adj}=.001$)と実施年度の単純主効果($F(2, 467)=31.653, p_{adj}<.001$)が有意となり、70歳群の得点($M=4.097, SE=0.202$)が、80歳群の得点($M=5.347, SE=0.328$)より、有意に低かった($t(467)=3.247, p_{adj}=.001$)。図4－5－4

男性における実施年度の単純主効果も有意となり、H29年度の得点($M=2.521, SE=0.345$)が、R2年度の得点($M=5.757, SE=0.333$)、R5年度の得点($M=5.888, SE=0.321$)より、有意に低かった(R2:$t(467)=6.743, p_{adj}<.001$;R5:$t(467)=7.140, p_{adj}<.001$)。R2年度とR5年度は、有意な差が見られなかった($t(467)=0.283, n.s.$)。図4－5－5

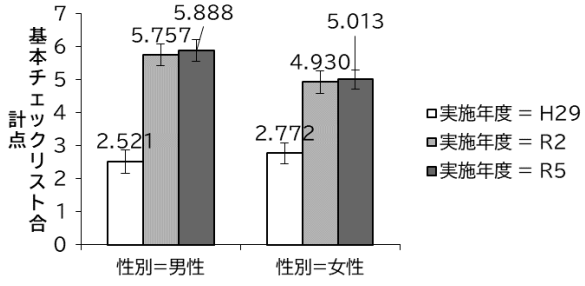
また、女性における年代の単純主効果($F(1, 467)=30.392, p_{adj}<.001$)と実施年度の単純主効果($F(2, 467)=16.894, p_{adj}<.001$)が有意となり、70歳群の得点($M=3.234, SE=0.185$)が、80歳群の得点($M=5.242, SE=0.314$)より、有意に低かった($t(467)=5.513, p_{adj}<.001$)。図4－5－4

女性における実施年度の単純主効果も有意となり、H29年度の得点($M=2.772, SE=0.307$)が、R2年度の得点($M=4.930, SE=0.342$)、R5年度の得点($M=5.013, SE=0.295$)より、有意に低かった(R2:$t(467)=4.693, p_{adj}<.001$;R5:$t(467)=5.265, p_{adj}<.001$)。R2年度とR5年度は、有意な差が見られなかった($t(467)=0.184, n.s.$)。図4－5－5



※エラーバーは標準誤差

図4－5－4. 基本チェックリスト得点(平均値):性別×年代



※エラーバーは標準誤差

図4－5－5. 基本チェックリスト得点(平均値):性別×実施年度

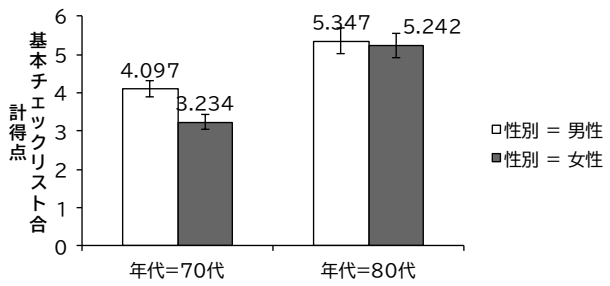
次に、年代で群分すると、70歳群は、性別の単純主効果($F(1, 467)=9.894, p=.002$)と、実施年度の単純主効果($F(2, 467)=35.736, p<.001$)が有意となり、70歳群男性の得点($M=4.097, SE=0.202$)が、70歳群女性の得点($M=3.234, SE=0.185$)よりも有意に高かった($t(467)=$

3.146,p_{adj}=.002)。80代は男性と女性の得点に有意な差が見られなかった(t(467)=0.231,*n.s.*)。図4−5−6

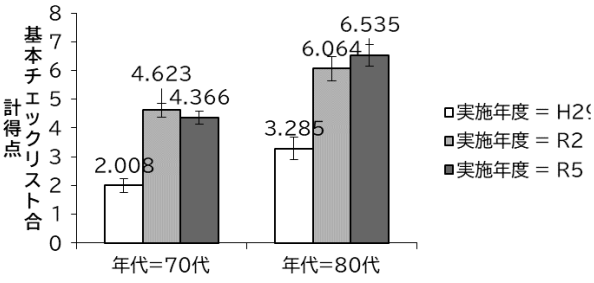
また、70代のH29年度の得点(*M*=2.008,*SE*=0.244)がR2年度の得点(*M*=4.623,*SE*=0.237)、R5年度の得点(*M*=4.366,*SE*=0.231)よりも有意に低かった。(R2:*t*(467)=7.680,p_{adj}<.001; R5:*t*(467)=7.015,p_{adj}<.001)。R2年度とR5年度における得点に有意な差が見られなかった(t(467)=0.775,*n.s.*)。図4−5−7

80歳群は、性別の単純主効果(*F*(1, 467)=0.054,*p*=.817)、性別と実施年度の交互作用(*F*(2, 467)=1.824,*p*=.162)は有意な差が見られなかった。

一方、実施年度については、単純主効果(*F*(2, 467)=20.471,*p*<.001)が有意となり、H29年度の得点(*M*=3.285,*SE*=0.392)が R2年度の得点(*M*=6.064,*SE*=0.415)、R5年度の得点(*M*=6.535,*SE*=0.370)よりも有意に低かった。(R2:*t*(467)=4.868,p_{adj}<.001; R5:*t*(467)=6.029,p_{adj}<.001)。R2年度とR5年度における得点に有意な差は見られなかった(t(467)=0.848,*n.s.*)。図4−5−7



※エラーバーは標準誤差
図4−5−6. 基本チェックリスト得点(平均値):年代×実施年度



※エラーバーは標準誤差
図4−5−7. 基本チェックリスト得点(平均値):年代×実施年度

基本チェックリストについて、項目別の結果を表4−5−1に示した。

表4－5－1. 基本チェックリスト項目別得点

①暮らしぶり
クロス集計表

変数		★暮らしぶり						
	出現値	0	1	2	3	4	5	合計
実施年度	H29	111	38	10	4	0	0	163
	R2	48	46	42	21	5	1	163
	R5	52	41	36	18	10	2	159
	合計	211	125	88	43	15	3	485

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.285	.201	.365
χ^2 =	78.998		
df =	10		
p =	.000		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		★暮らしぶり					
	出現値	0	1	2	3	4	5
実施年度	H29	△ **111**	38	▼ **10**	▼ **4**	▼ **0**	0
	R2	▼ **48**	46	△ **42**	△ **21**	5	1
	R5	▼ **52**	41	36	18	△ **10**	2

*p*値

変数		★暮らしぶり					
	出現値	0	1	2	3	4	5
実施年度	H29	.000	.378	.000	.000	.005	.216
	R2	.000	.381	.002	.027	.982	.992
	R5	.001	.996	.073	.184	.005	.210

クロス表(全体に対する比率%)

変数		★暮らしぶり						
	出現値	0	1	2	3	4	5	合計
実施年度	H29	22.89	7.84	2.06	0.82	0.00	0.00	33.61
	R2	9.90	9.48	8.66	4.33	1.03	0.21	33.61
	R5	10.72	8.45	7.42	3.71	2.06	0.41	32.78
	合計	43.51	25.77	18.14	8.87	3.09	0.62	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		★暮らしぶり						
	出現値	0	1	2	3	4	5	合計
実施年度	H29	68.10	23.31	6.13	2.45	0.00	0.00	100
	R2	29.45	28.22	25.77	12.88	3.07	0.61	100
	R5	32.70	25.79	22.64	11.32	6.29	1.26	100
	合計	43.51	25.77	18.14	8.87	3.09	0.62	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		★暮らしぶり						
	出現値	0	1	2	3	4	5	合計
実施年度	H29	52.61	30.40	11.36	9.30	0.00	0.00	33.61
	R2	22.75	36.80	47.73	48.84	33.33	33.33	33.61
	R5	24.64	32.80	40.91	41.86	66.67	66.67	32.78
	合計	100	100	100	100	100	100	100

②運動機能の低下

クロス集計表

変数		★KCL運動機能_低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	20	142	162
	R2	36	129	165
	R5	48	115	163
	合計	104	386	490

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.171	.083	.255
χ^2 =	14.266		
df =	2		
p =	.001		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		★KCL運動機能_低下	
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無
実施年度	H29	**▼ 20**	**△ 142**
	R2	36	129
	R5	**△ 48**	**▼ 115**

p値

変数		★KCL運動機能_低下	
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無
実施年度	H29	.001	.001
	R2	.819	.819
	R5	.002	.002

クロス表(全体に対する比率%)

変数		★KCL運動機能_低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	4.08	28.98	33.06
	R2	7.35	26.33	33.67
	R5	9.80	23.47	33.27
	合計	21.22	78.78	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		★KCL運動機能_低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	12.35	87.65	100
	R2	21.82	78.18	100
	R5	29.45	70.55	100
	合計	21.22	78.78	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		★KCL運動機能_低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	19.23	36.79	33.06
	R2	34.62	33.42	33.67
	R5	46.15	29.79	33.27
	合計	100	100	100

③低栄養状態

クロス集計表

変数		★KCL低栄養		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	151	14	165
	R2	161	3	164
	R5	159	4	163
	合計	471	21	492

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.149	.061	.234
χ^2 =	10.880		
df =	2		
p =	.004		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		★KCL低栄養	
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有
実施年度	H29	**▼ 151**	**△ 14**
	R2	161	3
	R5	159	4

p値

変数		★KCL低栄養	
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有
実施年度	H29	.001	.001
	R2	.058	.058
	R5	.161	.161

クロス表(全体に対する比率%)

変数		★KCL低栄養		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	30.69	2.85	33.54
	R2	32.72	0.61	33.33
	R5	32.32	0.81	33.13
	合計	95.73	4.27	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		★KCL低栄養		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	91.52	8.48	100
	R2	98.17	1.83	100
	R5	97.55	2.45	100
	合計	95.73	4.27	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		★KCL低栄養		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	32.06	66.67	33.54
	R2	34.18	14.29	33.33
	R5	33.76	19.05	33.13
	合計	100	100	100

④口腔機能低下
クロス集計表

変数		★KCL口腔機能低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	15	151	166
	R2	36	134	170
	R5	49	120	169
	合計	100	405	505

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.205	.120	.288
χ^2 =	21.309		
df =	2		
p =	.000		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		★KCL口腔機能低下	
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無
実施年度	H29	**▼ 15**	**△ 151**
	R2	36	134
	R5	**△ 49**	**▼ 120**

p値

変数		★KCL口腔機能低下	
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無
実施年度	H29	.000	.000
	R2	.581	.581
	R5	.000	.000

クロス表(全体に対する比率%)

変数		★KCL口腔機能低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	2.97	29.90	32.87
	R2	7.13	26.53	33.66
	R5	9.70	23.76	33.47
	合計	19.80	80.20	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		★KCL口腔機能低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	9.04	90.96	100
	R2	21.18	78.82	100
	R5	28.99	71.01	100
	合計	19.80	80.20	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		★KCL口腔機能低下		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	15.00	37.28	32.87
	R2	36.00	33.09	33.66
	R5	49.00	29.63	33.47
	合計	100	100	100

⑤閉じこもり
クロス集計表

変数		★KCL閉じこもり		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	164	3	167
	R2	157	12	169
	R5	147	20	167
	合計	468	35	503

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.163	.077	.247
χ^2 =	13.373		
df =	2		
p =	.001		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		★KCL閉じこもり	
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有
実施年度	H29	**△ 164**	**▼ 3**
	R2	157	12
	R5	**▼ 147**	**△ 20**

p値

変数		★KCL閉じこもり	
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有
実施年度	H29	.001	.001
	R2	.929	.929
	R5	.002	.002

クロス表(全体に対する比率%)

変数		★KCL閉じこもり		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	32.60	0.60	33.20
	R2	31.21	2.39	33.60
	R5	29.22	3.98	33.20
	合計	93.04	6.96	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		★KCL閉じこもり		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	98.20	1.80	100
	R2	92.90	7.10	100
	R5	88.02	11.98	100
	合計	93.04	6.96	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		★KCL閉じこもり		
	出現値	ﾘｽｸ無	ﾘｽｸ有	合計
実施年度	H29	35.04	8.57	33.20
	R2	33.55	34.29	33.60
	R5	31.41	57.14	33.20
	合計	100	100	100

⑥認知機能の低下

クロス集計表

変数		★KCL認知機能		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	43	121	164
	R2	42	123	165
	R5	43	125	168
	合計	128	369	497

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.008	.000	.095
χ^2 =	0.029		
df =	2		
p =	.986		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		★KCL認知機能	
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無
実施年度	H29	43	121
	R2	42	123
	R5	43	125

p値

変数		★KCL認知機能	
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無
実施年度	H29	.868	.868
	R2	.914	.914
	R5	.954	.954

クロス表(全体に対する比率%)

変数		★KCL認知機能		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	8.65	24.35	33.00
	R2	8.45	24.75	33.20
	R5	8.65	25.15	33.80
	合計	25.75	74.25	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		★KCL認知機能		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	26.22	73.78	100
	R2	25.45	74.55	100
	R5	25.60	74.40	100
	合計	25.75	74.25	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		★KCL認知機能		
	出現値	ﾘｽｸ有	ﾘｽｸ無	合計
実施年度	H29	33.59	32.79	33.00
	R2	32.81	33.33	33.20
	R5	33.59	33.88	33.80
	合計	100	100	100

各項目と調査実施年度との関連を検討するため、カイ2乗検定を行ったところ、有意な関連が見られた項目は、①暮らしぶり($X^2(10, N=485)=78.998, p<.001$)、②運動機能低下($X^2(2, N=490)=14.266, p=.001$)、③低栄養状態($X^2(2, N=492)=10.880, p=.004$)、④口腔機能の低下($X^2(2, N=505)=21.309, p<.001$)、⑤閉じこもり($X^2(2, N=503)=13.373, p=.001$)の5項目であった。

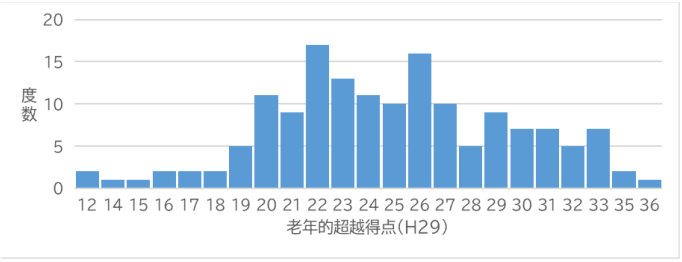
残査分析の結果、いずれの項目もH29年度より、R2年度、R5年度の方が「リスク無」の人数が有意に少なかった。

一方、認知機能については、H29年度、R2年度、R5年度で有意な差が見られなかった。($p=.986$)

4－6. 老年的超越

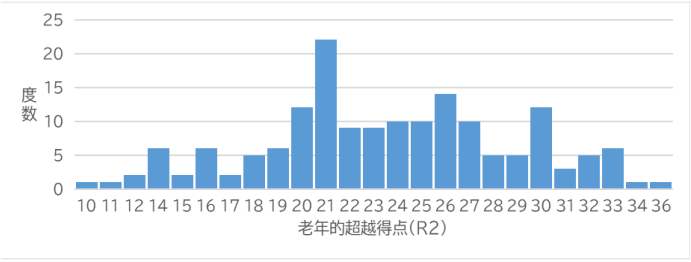
日本版老年的超越質問紙短縮版12項目の合計得点の分布を実施年度別に図4－6－1に示した。

実施年度



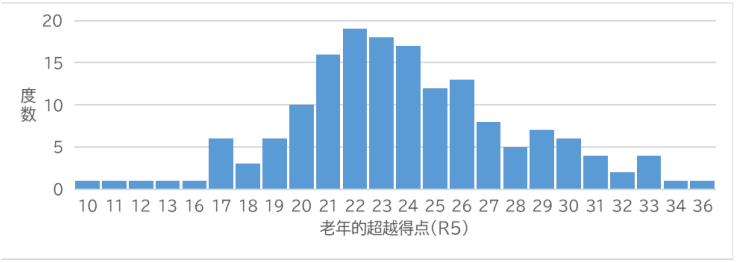
一様性の検定

χ2乗値	76.929				
自由度	22				
p値	.000				
平均値	24.884	歪度	-0.029	正規性	0.074
標準偏差	4.730	尖度	-0.143	補正p値	.037



一様性の検定

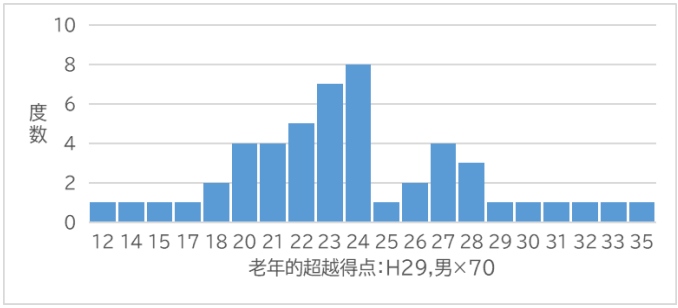
χ2乗値	92.424				
自由度	24				
p値	.000				
平均値	23.576	歪度	-0.098	正規性	0.080
標準偏差	5.309	尖度	-0.381	補正p値	.012



一様性の検定

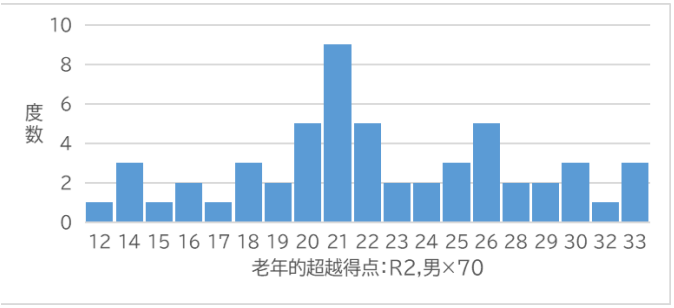
χ2乗値	122.791				
自由度	23				
p値	.000				
平均値	23.773	歪度	-0.015	正規性	0.093
標準偏差	4.399	尖度	0.718	補正p値	.002

男性×70代



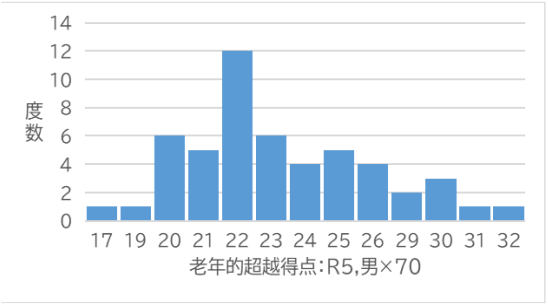
一様性の検定

χ2乗値	35.600				
自由度	19				
p値	.012				
平均値	23.600	歪度	0.038	正規性	0.145
標準偏差	4.594	尖度	0.628	補正p値	.010



一様性の検定

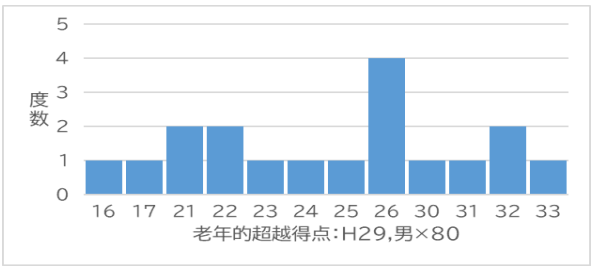
χ2乗値	24.109				
自由度	18				
p値	.151				
平均値	22.600	歪度	0.234	正規性	0.128
標準偏差	5.191	尖度	-0.414	補正p値	.025



一様性の検定

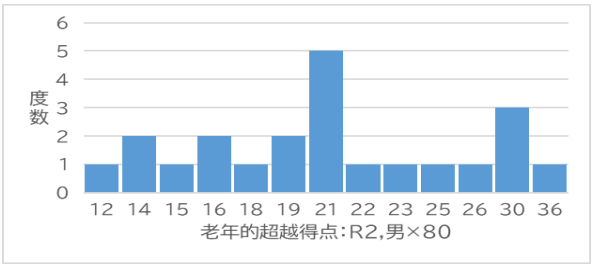
χ2乗値	29.294				
自由度	12				
p値	.004				
平均値	23.510	歪度	0.867	正規性	0.169
標準偏差	3.313	尖度	0.377	補正p値	.001

男性×80代



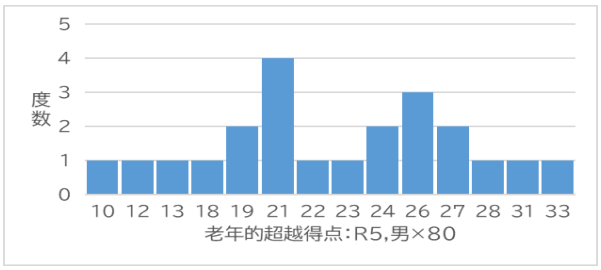
一様性の検定

χ2乗値	6.000				
自由度	11				
p値	.873				
平均値	25.167	歪度	-0.054	正規性	0.156
標準偏差	5.009	尖度	-0.660	補正p値	.292



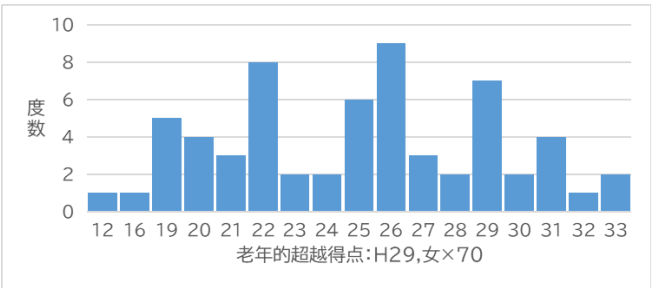
一様性の検定

χ2乗値	9.909				
自由度	12				
p値	.624				
平均値	21.364	歪度	0.670	正規性	0.160
標準偏差	6.145	尖度	0.087	補正p値	.151



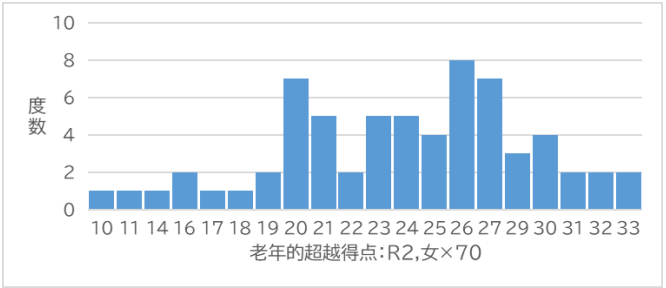
χ2乗値	7.273				
自由度	13				
p値	.888				
平均値	22.364	歪度	-0.435	正規性	0.134
標準偏差	5.794	尖度	0.121	補正p値	.381

女性×70代



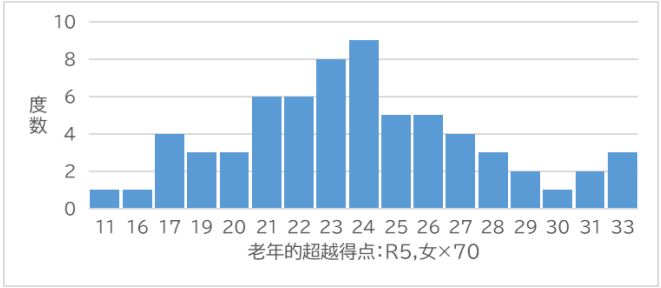
一様性の検定

χ2乗値	27.935				
自由度	16				
p値	.032				
平均値	24.871	歪度	-0.290	正規性	0.098
標準偏差	4.400	尖度	-0.078	補正p値	.149



一様性の検定

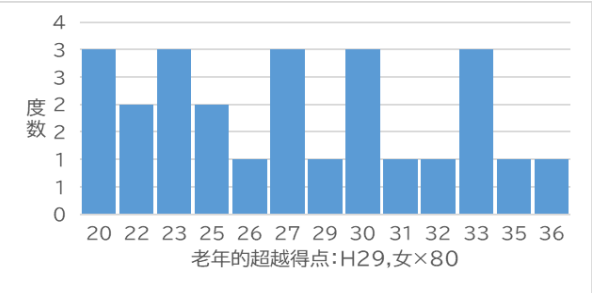
χ2乗値	29.462				
自由度	19				
p値	.059				
平均値	24.000	歪度	-0.477	正規性	0.086
標準偏差	5.006	尖度	0.303	補正p値	.273



一様性の検定

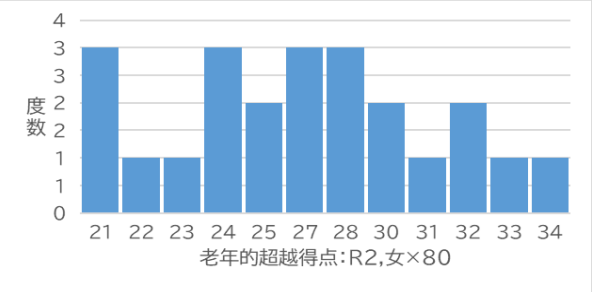
χ2乗値	23.121				
自由度	16				
p値	.111				
平均値	23.727	歪度	-0.047	正規性	0.096
標準偏差	4.241	尖度	0.661	補正p値	.142

女性×80代



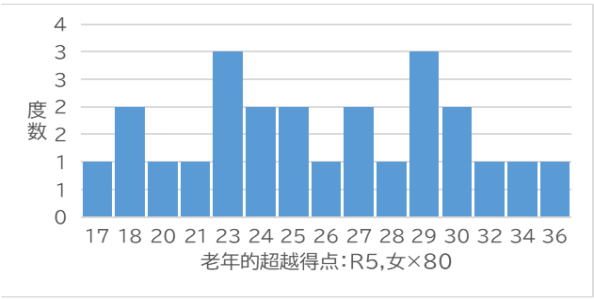
一様性の検定

χ2乗値	5.680				
自由度	12				
p値	.931				
平均値	27.280	歪度	0.074	正規性	0.129
標準偏差	4.903	尖度	-1.151	補正p値	.355



一様性の検定

χ2乗値	4.652				
自由度	11				
p値	.947				
平均値	26.826	歪度	0.139	正規性	0.110
標準偏差	4.019	尖度	-1.058	補正p値	.667



一様性の検定

χ2乗値	4.750				
自由度	14				
p値	.989				
平均値	25.750	歪度	0.070	正規性	0.082
標準偏差	4.980	尖度	-0.399	補正p値	.945

図4－6－1. 老年的超越得点:年度×性別×年代

年代、性別、実施年度について分散分析を行った結果、年代の主効果($F(1,471)=5.137, p=.024$)、性別の主効果($F(1,471)=23.033, p<.001$)、実施年度の主効果($F(2,471)=3.864, p=.022$)、が有意となり、年代と性別の交互作用($F(1,471)=7.739, p=.006$)も有意となった。

多重比較(Holm 法)の結果、年代では、70歳群の得点($M=23.704, SE=0.254$)が80歳群の得点($M=24.795, SE=0.409$)より有意に低かった($t(471)=2.267, p_{adj}=.024$)。図4－6－2

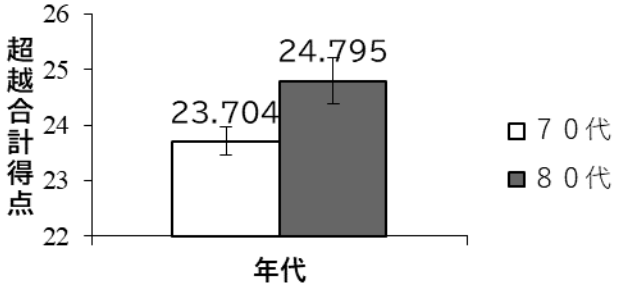


図4－6－2. 老年的超越得点(平均値):年代

※エラーバーは標準誤差

性別は、男性の得点($M=23.904, SE=0.355$)が女性の得点($M=25.404, SE=0.325$)より

有意に低かった（t(471)＝4.799,p_{adj}<.001）。図4－6－3

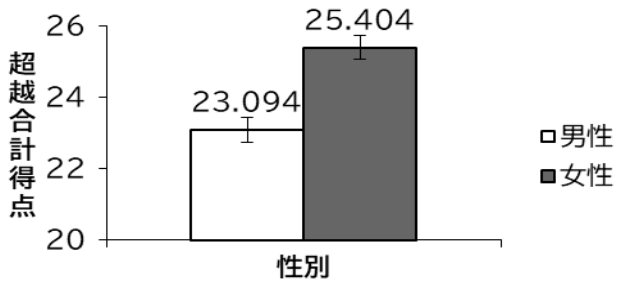


図4－6－3. 老年的超越得点（平均値）：性別

※エラーバーは標準誤差

実施年度では、H29年度の得点（M＝25.203,SE＝0.427）がR2年度の得点（M＝23.695,SE＝0.412）、R5年度の得点（M＝23.849,SE＝0.411）より有意に高かった（R2：t(471)＝2.540,p_{adj}＝.034；R5：t(471)＝2.283,p_{adj}＝.046）。R2年度とR5年度は有意な差がみられなかった（t(471)＝0.265,n.s.）。図4－6－4

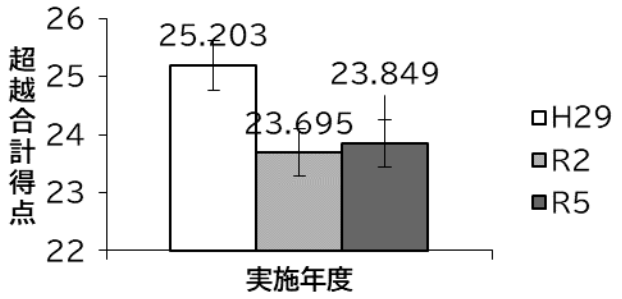
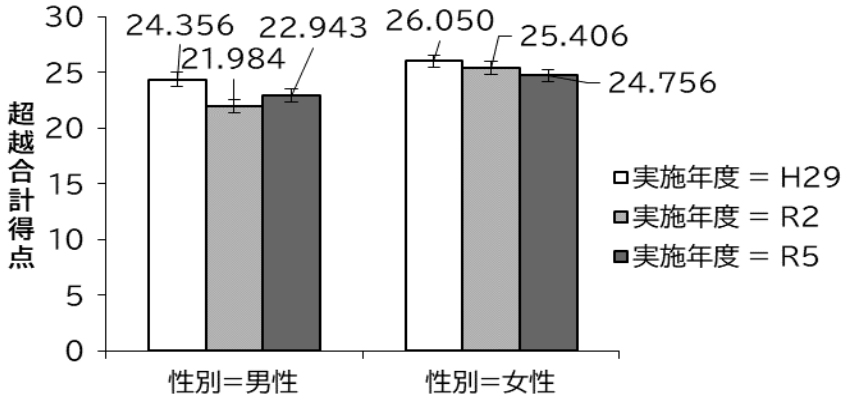


図4－6－4. 老年的超越得点（平均値）：実施年度

※エラーバーは標準誤差

また、下位検定の結果、男性における実施年度の単純主効果（F(2, 471)＝3.659,p=.026）が有意となり、H29年度の得点（M＝24.356,SE＝0.647）が、R2年度の得点（M＝21.984,SE＝0.594）より有意に高かった（t(471)＝2.700,p_{adj}=.022）。H29年度とR5年度（t(471)＝1.601,$n.s.$）、R2年度と R5年度（t(471)＝1.134,$n.s.$）は、有意な差は認められなかった。図4－6－5

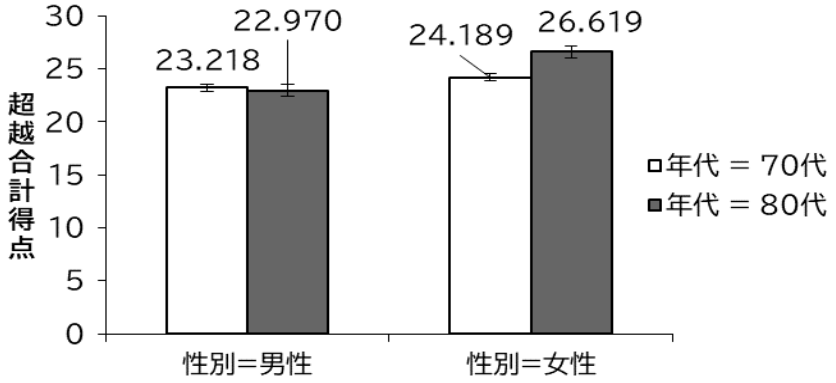


※エラーバーは標準誤差

図4－6－5. 老年的超越得点(平均値):性別×実施年度

女性は、年代における単純主効果(F(1, 471)＝13. 947,p<.001)が有意となり、70歳群得点(M＝24. 189,SE＝0. 339)が、80歳群の得点(M＝26. 619,SE＝0. 555)より有意に低かった(t(471)＝3. 735, p_{adj}<.001)。

男性は、70歳群と80歳群で有意な差は見られなかった。(t(471)＝0. 350, $n.s.$)。図4－6－6



※エラーバーは標準誤差

図4－6－6. 老年的超越得点(平均値):性別×年代

4－7. 日中の過ごし方

8項目について、各実施年度との関連があるかを検討するため、カイ2乗検定を行ったところ、「ボランティア」(X^2(2,N=502)＝6. 226,p=.044)、「田畑」(X^2(2,N=503)＝10. 322,p=.006)、「家事」(X^2(2,N=501)＝65. 104,p<.001)、「運動」(X^2(2,N=501)＝101. 607,p<.001)の4項目で、各年度の間に有意な差が見られた。

残査分析の結果、「ボランティア」(p=. 044)は令和2年度に有意に増えており、「家事」(p<. 001)と「運動」(p<. 001)は令和2年度、令和5年度とも有意に増えていた。表4－7－1

表4－7－1. 日中の過ごし方
①収入のある仕事
クロス集計表

変数		仕事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	32	139	171
	R2	36	131	167
	R5	31	135	166
	合計	99	405	504

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.034	.000	.121
χ^2 =	0.580		
df =	2		
p =	.748		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		仕事	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	32	139
	R2	36	131
	R5	31	135

p値

変数		仕事	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.707	.707
	R2	.446	.446
	R5	.701	.701

クロス表(全体に対する比率%)

変数		仕事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	6.35	27.58	33.93
	R2	7.14	25.99	33.13
	R5	6.15	26.79	32.94
	合計	19.64	80.36	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		仕事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	18.71	81.29	100
	R2	21.56	78.44	100
	R5	18.67	81.33	100
	合計	19.64	80.36	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		仕事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	32.32	34.32	33.93
	R2	36.36	32.35	33.13
	R5	31.31	33.33	32.94
	合計	100	100	100

②ボランティア
クロス集計表

変数		ボランティア		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	16	155	171
	R2	31	134	165
	R5	23	143	166
	合計	70	432	502

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.111	.024	.197
χ^2 =	6.226		
df =	2		
p =	.044		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		ボランティア	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	**▼ 16**	**△ 155**
	R2	**△ 31**	**▼ 134**
	R5	23	143

p値

変数		ボランティア	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.033	.033
	R2	.028	.028
	R5	.968	.968

クロス表(全体に対する比率%)

変数		ボランティア		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	3.19	30.88	34.06
	R2	6.18	26.69	32.87
	R5	4.58	28.49	33.07
	合計	13.94	86.06	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		ボランティア		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	9.36	90.64	100
	R2	18.79	81.21	100
	R5	13.86	86.14	100
	合計	13.94	86.06	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		ボランティア		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	22.86	35.88	34.06
	R2	44.29	31.02	32.87
	R5	32.86	33.10	33.07
	合計	100	100	100

③田畑

クロス集計表

変数		田畑		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	36	135	171
	R2	58	108	166
	R5	58	108	166
	合計	152	351	503

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.143	.057	.228
χ^2 =	10.322		
df =	2		
p =	.006		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		田畑	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	**▼ 36**	**△ 135**
	R2	58	108
	R5	58	108

p値

変数		田畑	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.001	.001
	R2	.106	.106
	R5	.106	.106

クロス表(全体に対する比率%)

変数		田畑		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	7.16	26.84	34.00
	R2	11.53	21.47	33.00
	R5	11.53	21.47	33.00
	合計	30.22	69.78	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		田畑		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	21.05	78.95	100
	R2	34.94	65.06	100
	R5	34.94	65.06	100
	合計	30.22	69.78	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		田畑		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	23.68	38.46	34.00
	R2	38.16	30.77	33.00
	R5	38.16	30.77	33.00
	合計	100	100	100

④家事

クロス集計表

変数		家事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	81	90	171
	R2	134	29	163
	R5	137	30	167
	合計	352	149	501

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.360	.282	.434
χ^2 =	65.104		
df =	2		
p =	.000		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		家事	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	**▼ 81**	**△ 90**
	R2	**△ 134**	**▼ 29**
	R5	**△ 137**	**▼ 30**

p値

変数		家事	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.000	.000
	R2	.000	.000
	R5	.000	.000

クロス表(全体に対する比率%)

変数		家事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	16.17	17.96	34.13
	R2	26.75	5.79	32.53
	R5	27.35	5.99	33.33
	合計	70.26	29.74	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		家事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	47.37	52.63	100
	R2	82.21	17.79	100
	R5	82.04	17.96	100
	合計	70.26	29.74	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		家事		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	23.01	60.40	34.13
	R2	38.07	19.46	32.53
	R5	38.92	20.13	33.33
	合計	100	100	100

⑤介護
クロス集計表

変数		家族の介護		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	12	159	171
	R2	19	148	167
	R5	12	153	165
	合計	43	460	503

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.071	.000	.158
χ^2 =	2.565		
df =	2		
p =	.277		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		家族の介護	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	12	159
	R2	19	148
	R5	12	153

p値

変数		家族の介護	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.378	.378
	R2	.110	.110
	R5	.475	.475

クロス表(全体に対する比率%)

変数		家族の介護		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	2.39	31.61	34.00
	R2	3.78	29.42	33.20
	R5	2.39	30.42	32.80
	合計	8.55	91.45	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		家族の介護		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	7.02	92.98	100
	R2	11.38	88.62	100
	R5	7.27	92.73	100
	合計	8.55	91.45	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		家族の介護		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	27.91	34.57	34.00
	R2	44.19	32.17	33.20
	R5	27.91	33.26	32.80
	合計	100	100	100

⑥孫の世話
クロス集計表

変数		孫の世話		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	14	157	171
	R2	23	139	162
	R5	15	149	164
	合計	52	445	497

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.086	.000	.172
χ^2 =	3.661		
df =	2		
p =	.160		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		孫の世話	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	14	157
	R2	23	139
	R5	15	149

p値

変数		孫の世話	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.230	.230
	R2	.059	.059
	R5	.501	.501

クロス表(全体に対する比率%)

変数		孫の世話		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	2.82	31.59	34.41
	R2	4.63	27.97	32.60
	R5	3.02	29.98	33.00
	合計	10.46	89.54	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		孫の世話		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	8.19	91.81	100
	R2	14.20	85.80	100
	R5	9.15	90.85	100
	合計	10.46	89.54	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		孫の世話		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	26.92	35.28	34.41
	R2	44.23	31.24	32.60
	R5	28.85	33.48	33.00
	合計	100	100	100

⑦運動

クロス集計表

変数		運動		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	41	130	171
	R2	119	47	166
	R5	116	48	164
	合計	276	225	501

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.450	.378	.518
χ^2 =	101.607		
df =	2		
p =	.000		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		運動	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	**▼ 41**	**△ 130**
	R2	**△ 119**	**▼ 47**
	R5	**△ 116**	**▼ 48**

p値

変数		運動	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.000	.000
	R2	.000	.000
	R5	.000	.000

クロス表(全体に対する比率%)

変数		運動		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	8.18	25.95	34.13
	R2	23.75	9.38	33.13
	R5	23.15	9.58	32.73
	合計	55.09	44.91	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		運動		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	23.98	76.02	100
	R2	71.69	28.31	100
	R5	70.73	29.27	100
	合計	55.09	44.91	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		運動		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	14.86	57.78	34.13
	R2	43.12	20.89	33.13
	R5	42.03	21.33	32.73
	合計	100	100	100

⑧学習・教養

クロス集計表

変数		学習・教養		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	58	113	171
	R2	44	114	158
	R5	50	113	163
	合計	152	340	492

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール	.054	.000	.142
χ^2 =	1.423		
df =	2		
p =	.491		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		学習・教養	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	58	113
	R2	44	114
	R5	50	113

p値

変数		学習・教養	
	出現値	している	していない
実施年度	H29	.289	.289
	R2	.315	.315
	R5	.941	.941

クロス表(全体に対する比率%)

変数		学習・教養		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	11.79	22.97	34.76
	R2	8.94	23.17	32.11
	R5	10.16	22.97	33.13
	合計	30.89	69.11	100

クロス表(行ごとの比率%)

変数		学習・教養		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	33.92	66.08	100
	R2	27.85	72.15	100
	R5	30.67	69.33	100
	合計	30.89	69.11	100

クロス表(列ごとの比率%)

変数		学習・教養		
	出現値	している	していない	合計
実施年度	H29	38.16	33.24	34.76
	R2	28.95	33.53	32.11
	R5	32.89	33.24	33.13
	合計	100	100	100

4－8. 現在の暮らし(経済的な状況)

各実施年度との関連があるかを検討するため、カイ2乗検定を行ったところ、有意な差が見られなかった。表4－8－1(※平成29年度は、当該質問は無し)

表4－8－1. 経済状況
クロス集計表

変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
経済状況	大変苦しい	9	5	14
	やや苦しい	31	38	69
	ふつう	96	102	198
	ややゆとりがある	21	20	41
	大変ゆとりがある	4	2	6
	合計	161	167	328

連関係数と独立性の検定

	推定値	95%下限	95%上限
クラメール V	.089	.000	.196
χ^2 =	2.617		
df =	4		
p =	.624		

残差分析

クロス表(△は有意に多い、▼は有意に少ない)

変数		実施年度	
	出現値	R2	R5
経済状況	大変苦しい	9	5
	やや苦しい	31	38
	ふつう	96	102
	ややゆとりがある	21	20
	大変ゆとりがある	4	2

p値

変数		実施年度	
	出現値	R2	R5
経済状況	大変苦しい	.245	.245
	やや苦しい	.437	.437
	ふつう	.788	.788
	ややゆとりがある	.770	.770
	大変ゆとりがある	.385	.385

クロス表(全体に対する比率%)

変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
経済状況	大変苦しい	2.74	1.52	4.27
	やや苦しい	9.45	11.59	21.04
	ふつう	29.27	31.10	60.37
	ややゆとりがある	6.40	6.10	12.50
	大変ゆとりがある	1.22	0.61	1.83
	合計	49.09	50.91	100

クロス表(行ごとの比率%)

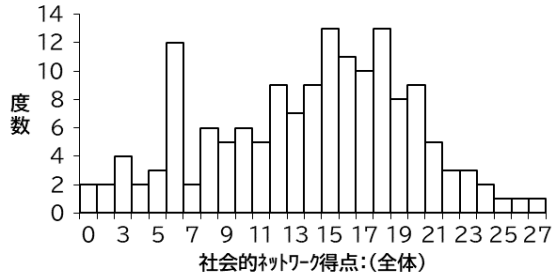
変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
経済状況	大変苦しい	64.29	35.71	100
	やや苦しい	44.93	55.07	100
	ふつう	48.48	51.52	100
	ややゆとりがある	51.22	48.78	100
	大変ゆとりがある	66.67	33.33	100
	合計	49.09	50.91	100

クロス表(列ごとの比率%)

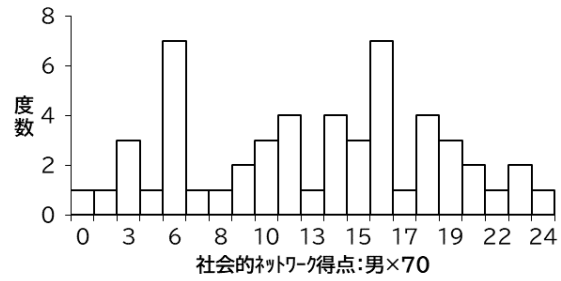
変数		実施年度		
	出現値	R2	R5	合計
経済状況	1	5.59	2.99	4.27
	2	19.25	22.75	21.04
	3	59.63	61.08	60.37
	4	13.04	11.98	12.50
	5	2.48	1.20	1.83
	合計	100	100	100

4－9. 社会的ネットワーク

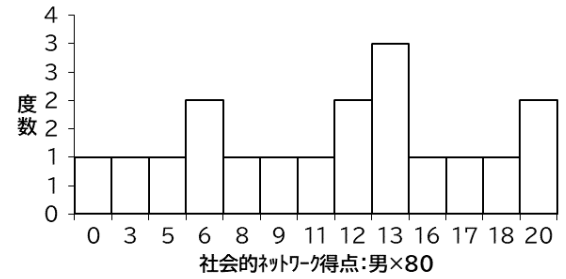
図4－9－1に性別×年代別の得点分布を示した。



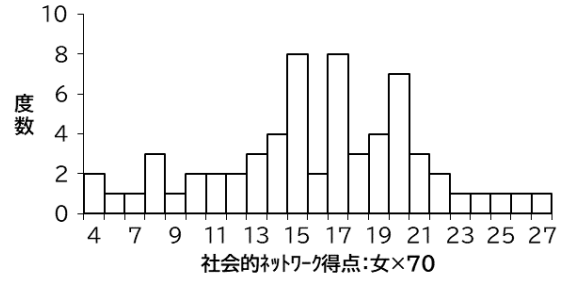
一様性の検定
χ2乗値 69.013
自由度 26
p値 .000
平均値 13.838 歪度 -0.283 正規性 0.099
標準偏差 5.823 尖度 -0.540 補正p値 .001



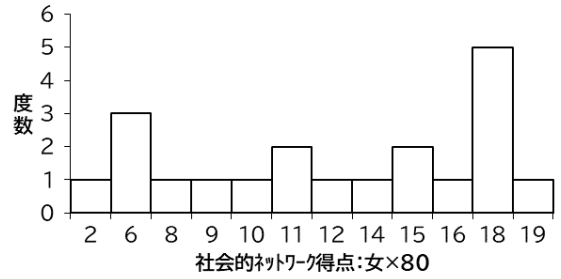
一様性の検定
χ2乗値 27.434
自由度 20
p値 .123
平均値 12.736 歪度 -0.168 正規性 0.110
標準偏差 6.124 尖度 -0.871 補正p値 .113



一様性の検定
χ2乗値 3.667
自由度 12
p値 .989
平均値 11.222 歪度 -0.190 正規性 0.109
標準偏差 5.786 尖度 -0.681 補正p値 .827



一様性の検定
χ2乗値 38.127
自由度 22
p値 .018
平均値 15.937 歪度 -0.323 正規性 0.095
標準偏差 5.183 尖度 -0.058 補正p値 .170



一様性の検定
χ2乗値 10.000
自由度 11
p値 .530
平均値 12.500 歪度 -0.412 正規性 0.158
標準偏差 5.135 尖度 -0.972 補正p値 .213

図4－9－1. 社会的ネットワーク合計得点

また、「性別」、「年代」、「主観的健康感」、「WHO5-J 得点」、「幸福度点数」、「基本チェックリスト得点」、「老年的超越得点」、「日中の活動」、「経済的な状況」を説明変数、社会的ネットワークを目的変数として重回帰分析を行った結果、「性別」、「年代」、「主観的健康感」、「幸福点数」、「日中の過ごし方:田畑」、「日中の過ごし方:孫の世話」、「日中の過ごし方:運動」が社会的ネットワーク得点を有意に予測していた(R^2=.375;性別:b=3.022,SE=0.945,β=.262,t(124)=3.199,p=.002;年代:b=-2.404,SE=1.

107,b=β=-.173,t(124)=2.173,p=.032;主観的健康感:b=-2.483,SE=0.856,β=-.273,t(124)=2.902,p=.004;幸福点数:b=0.867,SE=0.294,β=.287,t(124)=2.949,p=.004; 田畑(日中の過ごし方):b=1.859,SE=0.925,β=.154,t(124)=2.009,p=.047;孫の世話(日中の過ごし方):b=5.723,SE=1.411,β=.306,t(124)=4.057,p<.001;運動(日中の過ごし方):b=2.462,SE=1.021,β=.197,t(124)=2.411,p=.017)。有意及び有意傾向の数値は太字で示した。表4－9－1

表4－9－1. 社会的ネットワーク得点に対する各変数の影響力

回帰係数　　目的変数 = 社会的ﾈｯﾄﾜｰｸ得点

変数名	係数	標準誤差	95%下限	95%上限	*t*値	df	*p*値	
切片	-2.983	4.492	-11.873	5.907	-0.664	124	.508	
性別	**3.022**	**0.945**	**1.152**	**4.891**	**3.199**	**124**	**.002**	**
年代	**-2.404**	**1.107**	**-4.595**	**-0.214**	**-2.173**	**124**	**.032**	*
主観的健康感	**2.483**	**0.856**	**0.790**	**4.176**	**2.902**	**124**	**.004**	**
WHO5合計	-0.115	0.121	-0.355	0.125	-0.948	124	.345	
幸福点	**0.867**	**0.294**	**0.285**	**1.450**	**2.949**	**124**	**.004**	**
基本チェックリスト合計	**-0.322**	**0.176**	**-0.670**	**0.025**	**-1.834**	**124**	**.069**	+
老年的超越得点	**0.218**	**0.113**	**-0.006**	**0.442**	**1.930**	**124**	**.056**	+
収入のある仕事	0.903	1.122	-1.318	3.123	0.805	124	.422	
ボランティア	-0.264	1.230	-2.698	2.170	-0.215	124	.830	
田畑	**1.859**	**0.925**	**0.027**	**3.690**	**2.009**	**124**	**.047**	*
家事	**-2.413**	**1.269**	**-4.925**	**0.099**	**-1.901**	**124**	**.060**	+
家族の介護	**2.883**	**1.550**	**-0.185**	**5.950**	**1.860**	**124**	**.065**	+
孫の世話	**5.723**	**1.411**	**2.931**	**8.516**	**4.057**	**124**	**.000**	**
運動	**2.462**	**1.021**	**0.441**	**4.483**	**2.411**	**124**	**.017**	*
学習・教養	0.732	0.943	-1.135	2.599	0.776	124	.439	
経済状況	0.055	0.703	-1.336	1.446	0.078	124	.938	

標準化係数　　目的変数 = 社会的ﾈｯﾄﾜｰｸ得点

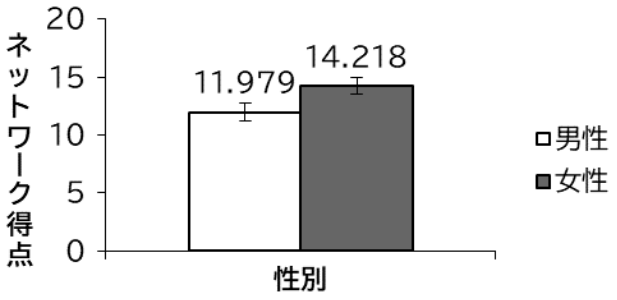
変数名	社会的ﾈｯﾄﾜｰｸ得点		95%下限	95%上限	VIF
性別	**.262**	**	**0.100**	**0.423**	**1.326**
年代	**-.173**	*	**-0.330**	**-0.015**	**1.254**
主観的健康感	**.273**	**	**0.087**	**0.459**	**1.753**
WHO5合計	-.109		-0.338	0.119	2.644
幸福点	**.287**	**	**0.094**	**0.480**	**1.880**
基本チェックリスト合計	**-.185**	+	**-0.385**	**0.015**	**2.023**
老年的超越得点	**.156**	+	**-0.004**	**0.317**	**1.302**
収入のある仕事	.061		-0.089	0.210	1.130
ボランティア	-.017		-0.170	0.137	1.189
田畑	**.154**	*	**0.002**	**0.305**	**1.159**
家事	**-.162**	+	**-0.331**	**0.007**	**1.446**
家族の介護	**.140**	+	**-0.009**	**0.288**	**1.117**
孫の世話	**.306**	**	**0.157**	**0.456**	**1.130**
運動	**.197**	*	**0.035**	**0.358**	**1.319**
学習・教養	.060		-0.092	0.211	1.168
経済状況	.006		-0.154	0.166	1.294
R^2	**.375**	**			

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

さらに、性別と年代について分散分析を行った結果、性別の主効果($F(1,150)=4.576, p=.034$)

と年代の主効果($F(1,150)=5.591, p=.019$)が有意となった。年代と性別の交互作用については、有意な差が見られなかった($F(1,150)=0.844, p=.360$)。

多重比較(Holm 法)の結果、女性($M=14.218, SE=0.717$)は、男性($M=11.979, SE=0.762$)より有意に得点が高かった($t(150)=2.139, p_{adj}=.034$)。図4－9－2

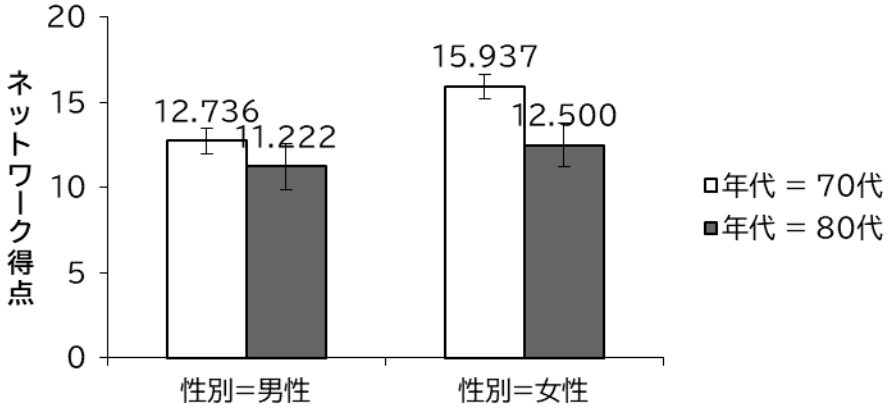


※エラーバーは標準誤差

図4－9－2. 社会的ネットワーク得点(平均値):性別

下位検定の結果、女性における年代の単純主効果($F(1, 150)=5.739, p=.018$)が有意となり、70歳群の得点($M=15.937, SE=0.704$)は、80歳群の得点($M=12.500, SE=1.250$)より有意に高かった($t(150)=2.396, p_{adj}=.018$)。

一方で、男性における年代の単純主効果は有意でなかった($t(150)=0.985$, n.s.)。図4－9－3



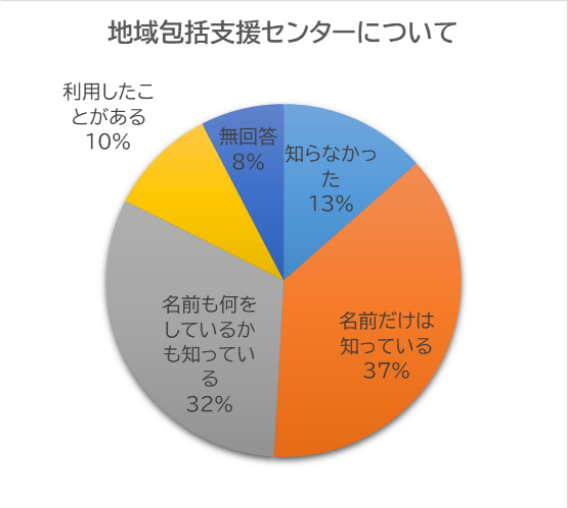
※エラーバーは標準誤差

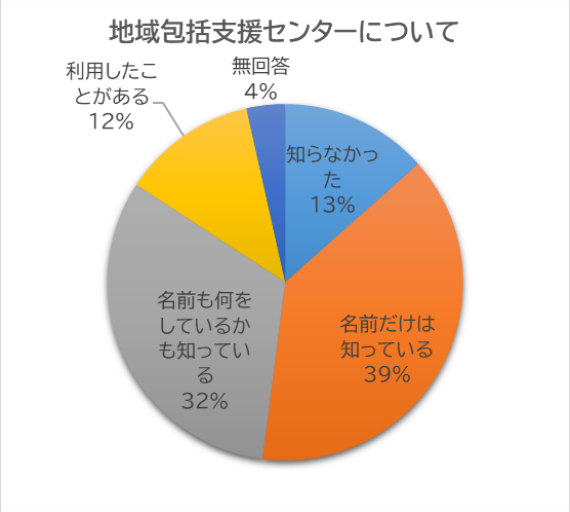
図4－9－3. 社会的ネットワーク得点(平均値):性別×年代

4－10. 地域包括支援センターの周知度

R2年度	（人）
知らなかった	23
名前だけは知っている	64
名前も何をしているかも知っている	54
利用したことがある	17
無回答	13
総計	**171**

R5年度	（人）
知らなかった	23
名前だけは知っている	66
名前も何をしているかも知っている	55
利用したことがある	21
無回答	6
総計	**171**





5. 高齢期における身体的、心理的変化の関連要因についての縦断的検討
6年間の追跡調査からわかったこと。

本報告は、H29年度に、本市に在住する70歳、80歳、90歳前後の高齢者を無作為抽出し、アンケート用紙を用いた訪問調査を実施し、その後、調査に回答があった者を対象に、R2年度に追跡調査、R5年度に再追跡調査としてアンケート用紙を用いた郵送調査を実施した結果である。

追跡調査を実施した R2年度の春から新型コロナウィルス感染症が全国的に流行し、外出が制限され、社会活動は極めて制約を受けることを余儀なくされた。R5年度の春から第5類に移行したが、高齢者は、外出時のマスク着用、過密となる集団行動の回避等継続した感染予防対策を重視している傾向が見受けられる。

このような状況下、高齢者の身体的、心理的な状態が6年間でどのように変化したかを以下、3つの視点から検討してみる。

1. 身体的側面からみた変化

下表は、調査対象者抽出時における、介護認定率及び死亡率である。R5年度は、R2年度と比較して、介護認定を受けている者が約4倍に増えている。これらの者は調査対象外であるが、本報告書表4－2－1「主観的健康観」で示したとおり、調査の対象となった者でも、H29年度に比べ、R2、R5年度は、主観的健康観が低下傾向にある。

また、基本チェックリストにおいても、H29年度（2．357点）とR5年度（4．936点）を比較して、平均点は約2．6点増加している。（点数が高い程リスクが高い）

項目別に見ると、「暮らしぶり※1」、「運動機能」、「口腔機能」、「閉じこもり傾向」は初回調査から、6年間

で有意に低下している。

このことは、新型コロナ感染症の拡大に起因する外出機会や他者との交流の場の減少などにより活動量が低下し、身体機能の不活性化が生じたことのほか、加齢による身体的な機能低下も要因の一つと考えられる。

今後の検討課題として、身体的機能が低下する年齢の特異点が存在するのか、その緩急の有無に何らかの要因があるのかを分析することは有用であると思われる。

（表：調査対象者抽出時における要介護認率及び死亡率）

	対象者	介護認定有（要支援、申請中含む）	死亡
R2追跡調査時	390 人	9人（2．3%）	12人（3．1%）
R5再追跡調時	262人	22人（8．4%）	9人（3．4%）

2．心理的な側面からみた変化

本報告書図4－3－1に示したとおり、「WHO5－J」の平均点も6年間で男女とも低下が見られる。男性は約4．2点、女性は、約3．5点で、男性が女性より低下が顕著であった。このことは、「うつ病の罹患リスク」にも現れており、「リスク有」がH29年度と比較してR2、R5年度ではうつ病の罹患リスクが有意に高かった。

また、「老年的超越」の平均点について、H29年度（25．2点）は、R2年度（23．7点）、R5年度（23，8点）より有意に高かった。 女性（25．4点）は男性（23．1点）より、80歳群（24．8点）は70歳群（23．7点）より有意に高かった。いずれの項目も、H29 年度と比較して R5年度は低下が見られた。

3．社会的側面からみた変化

「日中の過ごし方」について、顕著な変化があった項目は、「ボランティアをしている」、「家事をしている」、「運動をしている」であった。

「ボランティアをしている」は、H29年度よりR2年度が有意に多く、「家事をしている」、「運動をしている」は、H29年度と比較して、R2年度とR5年度は有意に多かった。

また、身体的側面、心理的側面の変化は、社会との繋がりとも関連しているという観点から、今年度から「社会的ネットワーク」についての質問を新たに追加した。これは、6設問の合計点（0～30点）で評価したものである。このことを検証するため、回帰分析を行った結果、「性別」、「年代」、「主観的健康感」、「幸福点」、「日中の過ごし方：田畑をしている」、「日中の過ごし方：孫の世話をしている」、「日中の過ごし方：運動をしている」の変数が、社会的ネットワークの得点に有意に影響をもたらしていることが分かった。

女性が男性より、70歳群は、80歳群より有意に点数が高いことも注目すべき点である。

以上3つの視点から6年間の変化を検討した結果、いずれの側面も相互に関連しながら環境の変化に大きく影響され、高齢期の幸福度に変化をもたらしたと推測できる。

充実した高齢期を過ごすために、環境の安定、身体的機能のゆるやかな低下、社会との繋がりによる、精神的な充足感とポジティブな心理状態は、重要であると考えられる。

また、今回の調査で、社会との繋がりが低得点である者は幸せではないという結果に必ずしも結びつかないという回答も見られた。新型コロナ禍の中、孤独との向き合い方に順応することが、主観的幸福感の維持に繋がっているのかもしれない。

さらに、心理的、社会的側面は、個人の経験や知識、価値観による差が大きく、一般化可能な結論を導きだすには、さらなる検討が必要である。

「暮らしぶり※1」
・バスや電車で１人で外出していますか
・日用品の買い物をしていますか
・預貯金の出し入れをしていますか
・友人の家を訪ねていますか
・家族や友人の相談にのっていますか

＊＊

学術指導：東京都健康長寿医療センター研究所　研究員　増井　幸恵

引用文献：清水　裕士（2016）.フリーソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育,研究実践における利用方法の提案　メディア・情報・コミュニケーション研究,1,59-73.